

序からみた秦漢期の著作

嘉瀬 達男

はじめに

古來、著作には序を附するならいがある。序には、しばしばその執筆経緯や目的などが記されるので、著作を論ずる時には特に重要視されてきた。それは、例えば『史記』という書物について、太史公自序を全く参照せずに論じようとするのが、不可能に近い行爲であることから理解されよう。だが太史公自序という序を『史記』との關わりで取り上げることはあつても、『漢書』・敍傳や『漢紀』・目錄并序と比較することはこれまで行なわれて來なかつた。つまり序は、著作を論ずるために、個別にはたびたび取り上げられてきたのであるが、序という範疇の中で序を相互に比較検討することは行なわれていないのである。

そこで小論では、時代を區切つて幾つかの序を集め、序の概觀を試みてみようと思う。そうすることによって、序

をもつ著作の執筆経緯や目的を比較することが可能になり、著作の制作状況を解明することにつながると思われるからである。今回は時代を秦漢に限ることにするが、それは著作の制作状況を考える場合、秦から後漢末にかけての時期は、次の魏晉南北朝期と區別した方がよいと思うからである。^①

早速にも序を列挙して比較検討を加えたいところだが、その前に序とは何かを定義する必要がある。なぜなら一口に序と言っても、全ての序が序と名付けられているわけではなく、中には序の役割を果たしつつも、著作の本文中に埋没してしまっている例もあるからである。そこで序とは何かを考えなければならぬのだが、意外に定義を下すことは難しい。試みに「序」や「敍」字に關する解釋を幾つか舉げてみよう。

敍、緒也。〔爾雅・釋詁上〕^②

序、緒也。〔詩・周頌・閔予小子、毛傳〕

敍、次第也。〔說文解字、三下〕

序者次事。〔文心雕龍・論說〕

以上がこれから概観してみようとすると秦漢前後に、序を説明する文である。「序」「敍」は、「端緒」「次第」を意味するということになるが、いずれも字義の解釋にとどまっておらず、序という文體を論じたものではない。もちろん序という文體を考える場合、序はこの「端緒」「次第」の意から派生して名付けられたとは考えられるが、序の定義を行なおうとする場合、このような字義の解釋だけに頼るのは極めて危険なことであろう。以上のような字義の解釋からは、この頃にはまだ序という文體がどのようなものであるのか、明確に定義されていなかったと考える方がかえってよいように思う。^③ その結果、まず序と名付けられた文章自體に検討を加え、序という文體のもつ性質を捉えなければなるまい。そこで次章においては、秦漢期の序を集め、その性質を考えることにする。

一、序の要素（一）——序（敍）と題された文について

まず、序（敘）と題された秦漢期の文章を抜き出してみよう。ただし、序という文體の性質を明確にするのが目的であるから、書物に對して附されたものを對象とし、その書の執筆編纂に直接攜わつた者による文に限定しておく。更に、成立事情に多くの問題を抱える『毛詩』『尚書』の序をひとまず除外すると、以下の八篇を見出すことができる。^④

1 『呂氏春秋』序意

2 『史記』太史公自序

3 『法言』序^⑤

4 『漢書』敘傳

5 『說文解字』敘

6 『潛夫論』敘錄

7 『風俗通義』序

8 『(前)漢紀』目錄并序

この八篇の序に共通する要素として、次の四點が指摘できよう。

まずその置かれた位置である。現行本で『風俗通義』『漢紀』が冒頭にあるのを除けば、すべて末尾に配されている。^⑥

これは『史記』『漢書』を根據とするまでもなく、本來序は末尾に置くのが通例であつたためと考えられる。『風俗通義』『漢紀』が冒頭にあるのは、撰者が本來の位置を改めたか、後人によつて末尾から冒頭に位置を變えられたためであり、例外であると思われる。末尾に置くのが通例となつたのは、序を全篇脱稿のちに執筆したためであろう。それを裏付ける點として、また以下の要素が挙げられる。

それは、序の中にその書の全篇名を記すことである。『呂氏春秋』と『風俗通義』以外の六書はみな、その書の全篇名を記している。また『說文解字』と『漢紀』を除く各書は、全篇名を列擧するのみならず、各篇の要旨や執筆の目的を逐一記している。『漢紀』にいたつては、目錄并序という名の通り目錄として獨立させ、現在の目次の形態を備えている。このことから目次は序から生じた可能性さえ指摘できよう。序が全書編集の最終段階に執筆されたのであれば、目錄もその際に作成されたのであろう。確かに目錄は全篇執筆終了後の方が作成しやすく、誤りも最小限に抑えることができる。そしてこれらの目錄には、全篇名がみな現在の配列通りに挙げられている。逆に考えれば、こ

の目録が作成されていたために、各篇の配列が目録通り保存されてきたのもあろう。^⑦

このことは、目録及びそれを含む序が発生した目的を考察する上で、きわめて重要である。つまり、執筆終了後に全篇名を序に記すことによって、全篇の配列が目録通り保存されてきたのであるから、序に目録を記したために、全篇の配列を保存し、各篇の傳存をも成し遂げたことになるのである。そうであるならば、序に目録を記した目的として、全篇の配列を保存し、各篇を保存することが考えられていても、全く不思議はないように思われるからである。さらに言えば、序字には先に見た通り「次第一」の意があることから、序はむしろ全篇の「次第一」を整え、全體の構成を序次して指し示す目録から発生した可能性さえ考えられるのである。果たして目録から序が発生したのか、先に考えたように序から目録が生まれたのか、明らかにはしがたいが、秦漢期において序と目録が非常に密接な関係にあることは理解されよう。

第三点としては、目録のみならずそれを含む序が著された目的に、この保存ということが考えられていたのではないかと思わせる要素がある。それは書物全體の字數を示していることである。字數を示すのは『史記』『説文解字』『風俗通義』『漢紀』に限られるが、^⑧全篇名を記すのと同様に、その書の全體を保存する目的があつたことを示唆しているよう。無論、字數をわざわざ記すのは、その多さを誇る意味もあつたかもしれない。しかし、序ではないが簡牘帛書（銀雀山出土『孫臏兵法』など）の各篇にもしばしば字數が記されていることから、秦漢期の執筆物は全般に、保存を豫想以上に強く意識していたことが推測される。この點は今後この時期の執筆物の制作狀況を考えると、特に重視されなければならないまい。

四點目の要素は表現である。序にはほぼ必ずその書や作者の價值を高めるべく、褒め讃える表現が見られるのである。序によつて表現のしかたは異なるが、書物の内容を自ら稱讚したり、その書のもつ意義を主張することによつて、

その書の價值を宣揚しているのである。このような表現上の差異はそれぞれの制作状況の違いをあらわしていると考えられるので、内容の検討は後に譲ることにする。しかしながら、本文の執筆を終了した後に添える文であれば、讚辭や褒辭をもつてその書物の結びを飾ろうとするのは、きわめて自然な行爲であると思う。特に小論は、その書の執筆編纂に直接攜わった者による、書物に對して附された序を對象としているので、序の執筆者のその書に對する自負が、その書や作者の價值を高めようとする表現をとることにつながったものと考えている。

多少の例外はあるものの、①末尾に置かれ、②篇名の列擧、③總字數の明記、④讚辭などの述べられていることが、秦漢期の序に多くみられる共通の要素である。次にはこの四つの要素に鑑みつつ、篇名に序（敘）字を附していないが序の役割を果たしている文章を検討することにした。

二、序の要素（二）——「序」と言われる文について

序と題されていないが、序と言われてきた文は決して少なくない。小論にはまず序という文體の性質を明確にする目的があるので、ここではその中でも前章で指摘した序に共通する四つの要素に照らし合わせ、確實に序と言っているものに考察を限ることにする。すると次の四篇が、序と題していないが序の役割を果たしている文章と考えられる。^⑩

- 9 『莊子』天下 10 『荀子』堯問 11 『淮南子』要略 12 『論衡』對作・自紀

以下、この四篇の概略をたどりながら、序と考えられる點を検討し、序のもつ性質、特にその表現について更なる考察を試みよう。

『莊子』天下篇は序と名附けられてはいないものの、從來しばしば『莊子』全體の序と言われてきた部分である。^⑪

この篇は『莊子』三十三篇の最後に位置しており、三十三篇の篇名や字數は記されていないが、『莊子』という書物全體に讚辭を添えている。

天下篇は「天下の方術を治むる者は多し。皆な其の有を以て加ふべからずと爲す。古えの所謂る道術なる者は、果たして悪くにか在る。曰く在らざることなし」との文で始まり、「古えの所謂る道術なる者」の所在をたずねて先秦諸子をひとしきり批判した後、「關尹・老聃か、古えの博大なる真人なるかな」と關尹・老子を「真人」と褒め讃える。そして最後に「（莊周）卮言を以て曼衍を爲し、重言を以て眞を爲し、寓言を以て廣を爲す。獨り天地の精神と往來して、萬物に敷衍せず」と莊周とその言、つまり『莊子』に觸れているが、ここでは「眞を爲し……廣を爲し……天地の精神と往來する」との讚辭をおくっている。これは明らかに他の諸子を批判することによつて、莊周や關尹・老聃の優位を際立たせているのである。更に「其の書瓌璋なりと雖も、而れども連犴傷ふ無し。其の辭參差なりと雖も、而れども諛詭觀るべし」のように、『莊子』という「書」と「其の辭」も稱讚している。「書」は圓轉して道理をやぶることがなく（「連犴傷ふ無し」）、「辭」は奇抜でみごとなものである（「諛詭觀るべし」といふ言い方は、『莊子』の價値を誇り世に宣揚しようとしたものであろう。このような表現が『莊子』という書物の末尾におかれているのであるから、この天下篇は莊周とその書『莊子』に對して稱讚の辭を加えるものと言えよう。

『荀子』堯問篇は、『荀子』三十二篇の末尾にあり、主に堯・舜をはじめとする賢者の言行を語る篇であるが、その最終章が荀卿と『荀子』という書を褒め讃える章となつてゐる。この章もまた篇名や字數を記さないが、やはり序と評されているものである。^⑬

この章の内容は、荀卿個人への褒辭が中心ではあるが、『荀子』という書物全體への讚辭もみえる。そこには次のようにある。

説を爲す者は、孫卿は孔子に及ばずと曰ふも、是れ然らず。孫卿は亂世に迫られ嚴刑に鱈せまられ、上に賢主なくして下は暴秦に遇ひ……孫卿も將に聖たらんとするの心を懷きつつ佯狂の色を蒙り、天下に視しめすに愚を以てす。……今の學者、孫卿の遺言餘教を得れば、以て天下の方式表儀と爲すに足り、存する所は神ままり過ぐる所は化す。其の善行を觀るに孔子も過ぎず。世の詳らかに察せずして聖人に非ずと云ふは奈何ぞや。天下の治まらざるは、孫卿の時に遇はざればなり。

章末の「天下の治まらざるは、孫卿の時に遇はざればなり」という表現は、孫卿がよい時代にさえ遭つたならば、天下は治まつたと主張しているものであり、その結果「孫卿は孔子に及ばずと曰ふも、是れ然らず」、つまり孔子にも及ぶ者とまで荀卿を褒め讃えるのである。『荀子』という書物については、「今の學者、孫卿の遺言餘教を得れば、以て天下の方式表儀と爲すに足り、存する所は神ままり過ぐる所は化す」という文がみえ、『荀子』という書物によつて「孫卿の遺言餘教を得れば」、「天下の方式表儀と爲すに足る」と、『荀子』のもつ價値を宣揚している。

このように『莊子』天下篇と『荀子』堯問篇は、字數・篇名こそ記さないが、書の末尾におかれ、それぞれに莊周・『莊子』、荀卿・『荀子』への讃辭となつてゐる。特に莊周と荀卿という個人に對して讃辭を惜しまず、『莊子』『荀子』の本文のほぼ末尾に置かれてゐることから、天下篇と堯問篇ともに莊周・荀卿自身の筆になるものではなく、後學が『莊子』『荀子』定本編集の最終段階で卷末に附したことを豫想させる。そして天下篇・堯問篇のように、編集の最終段階で添えられた末尾の讃辭は、序という文體の一つの源流であるかもしれない。それはこの兩篇が、序として『莊子』『荀子』という書物の内容を説明するというよりも、兩書と莊周・荀卿という個人に對して稱讚の辭をおくることに重點をおきつつ、同時に『莊子』『荀子』という書物の價値をも宣揚しており、末尾におかれた序、もしくは跋の意味をもつてゐるように思われるからである。

次に『淮南子』要略をみてみよう。要略は『淮南子』二十一篇の最後に置かれ、一篇の紙幅を割いて『淮南子』という書物全體を詳細に語っている。字數の記載はみえないが、篇名は現行本の順に逐一説明を加えつつ列擧されている。

この篇はまず「夫れ書論を作爲するは、道德を紀綱し、人事を經緯する所以なり」と作成の動機から述べ始め、「道德を紀綱し、人事を經緯する」ために『淮南子』二十篇を著すと言う。「二十篇」とは要略を含まない數であり、篇目にも要略は擧げられていない。つまり要略は『淮南子』の他の二十篇とは異なり、本論以外の篇として扱われているのである。續けて「原道は……、俶眞は……」と二十篇の要點を順に説きつつ、各篇執筆の目的や相互の繋がりをも説明している。この『淮南子』要略以上に、各篇それぞれの意義を子細に説く序はない。それほど力を込めて説明した上で、次には古來よりの諸子學説が現れた歴史的必然を論じて批判を加え、最後に『淮南子』という書物編纂の必要性を説き、『淮南子』に對する讚辭をもつて結ばれている。^⑮

この篇は要略の名が示す通り、『淮南子』という書物の要點を述べることに大半の意が注がれている。^⑯ 既述のとおり各篇の要點をあげ、その意義や價值を逐一説明しているのだが、全二十篇に及んで説明を行なっているので、結果として『淮南子』という書物全體の意義・價值を説明することになつてゐる。もちろん『淮南子』という書物の意義・價值を、その書の中で説明するのであるから、その語は稱讚の辭となつてゐる。しかも要略は他篇に比肩しうる程の量を備えながら、他の二十篇とは區別された篇なのである。以上の點から、要略は序と名附けられてはいないが、序の役割を十分に果たしている篇と言えよう。

『論衡』では末尾に置かれた對作・自紀兩篇が序と言われている。^⑰ ともに問答形式をとつてゐるが、對作は『論衡』という書物の序で、自紀は王充の自傳の意味合いが強い。現存する八十五篇の篇目や字數は記されていないが、兩篇

ともに『論衡』の意義を強調するのに務めており、『論衡』を大きな価値を備えた書として讃えている。

對作では「論衡の造らるるは、衆書の並びに實を失ひ、虚妄の言の眞美に勝るに起こるなり」のように、『論衡』作成の目的として「衆書の並びに實を失ひ、虚妄の言の眞美に勝る」後漢の状況を指摘し、また「論衡の九虚・三増は、俗をして實誠を務めしむる所以なり。論死・訂鬼は俗をして喪葬を薄からしむる所以なり」と、「九虚（書虚より道虚に至る九篇）」「三増（語増・儒増・藝増の三篇）」「論死」「訂鬼」篇の執筆目的が記されている。一方、自紀はどちらかといえば王充の出身や性格についての記述が多いが、「偽書俗文の多く實誠ならざるを傷み、故に論衡の書を爲る」のような、前記の對作の文にも似た『論衡』執筆の意圖を説く文がある。このように『論衡』の對作・自紀は『論衡』作成の目的を説明し、その必要性を主張する。そのため『論衡』という書をただ稱讚するのではなく、『論衡』のもつ意義や価値を説くことで、讚辭に代えている面がある。例えば對作に「論衡は細説微論し、世俗の疑を解釋し、是非の理を辯照し、後進をして然否の分を曉見せしむ」という文は、『論衡』が論理によつて是非を丁寧の説明していると言うのである。このような表現は、一見ただ『論衡』のもつ意義や価値を説く文に過ぎないように見えるが、王充自身が『論衡』の末尾に添えた文として考えてみれば、作者王充が自作への自負を表明し、『論衡』を自讚した表現として理解できよう。

このように『莊子』天下、『荀子』堯問、『淮南子』要略、『論衡』對作・自紀は、序と名附けられていないが、末尾におかれ、その書や作者の価値を高める稱讚の辭や褒辭が見られることから、序として考えてよいと思う。特に序全體の變遷を概観し、それぞれのおかれた位置を考えてみれば、篇名目録や字數の記載がなくとも、これらの篇を序とすべきことがより明確になるだろう。そこで次には序の變遷を概観しつつ、著作の制作状況もいささか考えてみることにしたい。

三、序の概観

まず、これまでに挙げた十二部の書物に附された序について、序に共通する要素と考えられた、末尾に置かれ、篇名・字數を記し、讚辭が述べられている點との關係を表にして確認しておこう。

褒辭・讚辭	字數の記載	篇名(目録)	末尾にあるもの	
○	×	×	○	莊子
○	×	×	○	荀子
○	×	×	○	呂覽
○	○	○	○	史記
○	×	○	○	淮南子
○	×	○	○	法言
○	×	○	○	漢書
○	×	×	○	論衡
○	○	○	○	說文
○	×	○	○	潛夫論
○	○	×	×	風俗通
○	○	○	×	漢紀

この表からは、『莊子』『荀子』の如く、序は初め書の末尾に添えられた讚辭であつたのが、後に目録や全書の字數を記すようになった流れが読み取れる。つまり序というものが確立される以前は、ただ末尾に稱讚の辭だけがおかれていたのである。そして各篇を配列し、全書を保存する必要性が生ずるようになるとともに、字數や篇名、また篇名目録を備えるようになったのである。やがて目録は目次として獨立し、序とともに末尾から冒頭へと位置を移した。それが『漢紀』の目録并序という形である。

このような變遷はまた、各書の制作状況と合わせて考えられなければならないだろう。そこで序の變遷をより詳細に把握し、そこに表れた各著作の制作状況を考えるために、更なる検討を続けよう。ここではこれらの序を、その内容と制作状況の性質から大きく四類に分けて考えることにしたい。

1. 『莊子』天下、『荀子』堯問

第一類は『莊子』『荀子』である。既述の通りともに莊周・荀卿の筆になるものではなく、後學が『莊子』『荀子』編集の最終段階で卷末に附したものと考えられた。内容は他の序に比べ、特に各書の内容に深く言及するものではない、どちらかと言えば關尹・老聃・莊周や荀卿といった人物を讀んでいるようであった。各篇名や字數の記述がないことから、書物よりもそれぞれの人物を讀えることに重點があるものと考えてよいだろう。

このことは兩序の執筆者が莊周・荀卿の後學であり、彼らによつて莊周・荀卿に關する文章が集められて『莊子』『荀子』が成立したと深い關わりがあるのではないだろうか。したがつて文章の纂集者たちが莊周・荀卿を崇拜し、兩篇によつて稱讚の辭を添えるのは、きわめて自然なことと思われるのである。莊周・荀卿という存在が後學たちを惹き付け、莊・荀に關する文章を彼らに集めさせるだけの求心力をもっていたのである。そうであるならば『莊子』『荀子』という書物は、莊周・荀卿に關する文章の保存を一つの目的としていたのであり、莊周・荀卿に關する一種の文集としての意味も見出しうるだろう。^⑭

2. 『呂氏春秋』序意、『淮南子』要略

第二類は『呂氏春秋』『淮南子』である。『呂氏春秋』序意篇は殘闕の可能性がある上、『呂氏春秋』の中でも十^⑮

二紀だけへの序と考えられているが、十二紀に對する讚辭は記されている。例えば「凡そ十二紀は、治亂存亡をを紀むる所以なり、壽夭吉凶を知る所以なり。上は之を天に揆り、下は之を地に驗べ、中は之を人に審らかにす。此の若くなれば、則ち是非・可不可遁るる所無し」と、十二紀は治亂存亡の秩序をたて、壽夭吉凶を知り、是非・可不可を全て包括した著作と自ら誇っている。

このように全てを包括しようとする志向は、同じ雑家の書とされる『淮南子』要略にも見られる。例えば篇末で「劉氏の書の若きは、天地の象を觀、古今の事に通じ、事を權りて制を立て、形を度りて宜しきを施す」と、『淮南子』は天地・古今に通じ「宜しきを施す」と言う。これは天地・古今のあらゆることに通じた上で『淮南子』が編纂されたと誇るものである。つまり『淮南子』は天地・古今の全てを包括したものと云っているのである。言うなれば兩書の雑家に分類される理由が、序意・要略にもうかがえるということではあるが、注意しておきたいのはこのような自負や褒辭はあくまで書物の内容に對するもので、呂不韋・淮南王個人には向けられていないことである。

この點は『莊子』『荀子』と明らかに異なるのだが、その原因はやはり各書の制作狀況の差異にもとづくものであろう。つまり『莊子』『荀子』は、莊周・荀卿を崇拜する後學たちによつて編集され、天下・堯問も彼らの筆になるので、莊周・荀卿という個人への讚辭がおくられた。それに對して『呂氏春秋』『淮南子』は呂不韋・淮南王を崇拜する後學ではなく、經濟力の豊かな呂不韋・淮南王のもとに集まつた食客たちによる執筆・編集である。その結果、序意・要略には呂不韋・淮南王個人に對する讚はなく、もつぱら『呂氏春秋』『淮南子』という書物への讚辭が記されたのではないだろうか。食客という執筆者と、經濟力を背景にした、監修者である呂不韋・淮南王との關係が、序意・要略という序の内容に反映しているように思われるのである。

3. 『史記』太史公自序、『漢書』敘傳、『漢紀』目錄并敘

次に『史記』、『漢書』、『漢紀』といった史書を一類としよう。『史記』太史公自序は、司馬氏の來歴に始まり、司馬談の「六家要旨」、『史記』執筆の経緯や、上大夫壺遂との問答、各篇執筆の目的・概説（目錄）などが記されている。太史公自序には司馬遷の自傳という面もあるため、他の序に比べるとかなり豊富な内容を備えているが、小論では書物に對して附された序を對象としているので、ここでは『史記』という書物について語る部分のみをとりあげることにする。『史記』にも雜家の書に似て「天下の放失せし舊聞を罔羅す」といった全てを包括しようとする志向が見られるが、それとともに「厥れ六經の異傳を協あはせ、百家の雜語を整齋す」というような、特にそれらを整合しようとする志向が見られる。また「之を名山に藏し、副は京師に在おき、後世の聖人君子を俟つ」と言うように、「後世」への強い期待も見出せる。この期待にもとづいて、『史記』という大部な書を保全し「後世」への確實な傳達を行なうために、全百三十篇の目錄が作成されたものと思われる。

それに對して『漢書』の敘傳は、班氏の來歴、班彪「王命論」、班固の自傳とその作品、漢王朝及び『漢書』への讃辭、各篇執筆の目的・概説（目錄）などを記している。『漢書』にも「凡そ漢書は……雅故を函くみ、古今に通じ、文字を正し、惟れ學林なり」と言うように、全てを包括しようとする志向が見られるが、『史記』ほど強い後世への期待はうかがい難い。確かに各篇執筆の目的や概説を行なう目錄はあるが、司馬遷が「後世の聖人君子を俟つ」と言うほどの強い期待は見えない。『論語』泰伯の「巍巍乎として其れ成功有り、煥乎として其れ文章有り」の文を敘傳中に引用することから分かるように、どちらかと言えば漢朝の「成功」を輝かしい「文章」にすることに目的をおいているようである。その證左として『漢書』敘傳には四字句が多用されていることが挙げられよう。特に各篇の概説を行なう部分は、その殆どが四字偶數句で構成されている。「煥乎」たる「文章」をもつて、漢朝の「成功」及び『漢

書』を飾るものと考えられよう。

そして『漢書』を「鈔撰し、略ぼ其の要を擧ぐ」という『(前)漢紀』目録并序は、漢史を略述し、執筆に到る経緯を述べ、讚辭を添えている。『漢紀』にも「茲れ亦た國の常訓、典籍の淵林有り」のような全體の包括を言う語がみえるが、『漢紀』はそもそも『漢書』を「刪略」し、皇帝の「用に便有る」ことを目指したものである。にもかかわらず、同じ序の中に「凡そ漢紀は、法式有り、監戒有り、廢亂有り……」のごとく、『漢紀』に備わっているものを列擧する文がある。このように『漢紀』序では、簡便でありながらも非常に多くのものの中に備えていると自讃している。多くのものを備えつつ簡便であるという主張は、厳しい見方をすれば矛盾しているのであるが、苟悅の自作への自負を表明したものとしておくのがよいであろう。更には『史記』『漢書』にみえた全體の包括への志向も、一種の自負の表明と考えることが可能であろう。

この史書類の序について、これまでの二類と比較してみよう。『史記』にも『淮南子』『呂氏春秋』同様、全體を包括しようとする意圖が見えたが、編集は司馬談と遷の父子によつて行なわれたものである。呂不韋や淮南王ほどの經濟力をもたなかつたであろう父子は、太史公の責務として包括を志したのであろう。『史記』の構成は『呂氏春秋』の影響を受けていると古來より指摘されているが、それは全體の包括を志向するという編集方針が一致している点から考えても、大いに可能性のあることと思われる。一方『漢書』は、班固を中心に編集され、『史記』同様に全體を包括しようとする意圖も見えたが、漢朝を贊美することに重きがおかれていた。更に『漢紀』になると、『漢書』を簡便にし、後漢獻帝に奏上することを目的にしていながら、全體の包括をも説いていた。『史記』の場合、通史であることから、全體を包括し得ていると言うことは可能だろう。しかし斷代史の『漢書』を「古今に通じ……惟れ學林なり」と言い、それを更に簡略化した『漢紀』を「典籍の淵林」と言いきるのには、いささか躊躇される。これらの語は、

それぞれ作者の自負より生じた稱讚の辭とするべきであらう。そうすればまた、『莊子』天下『荀子』堯問にみられた、弟子たちが『莊子』『荀子』という書物の價値を宣揚しようとして添えた、あの稱讚の辭にも通じる性質をもつものと理解できる。弟子たちは莊周・荀卿への崇拜から天下・堯問の文を記したが、同時にまた『莊子』『荀子』という書のもつ價値を誇っていた。このように書物の價値を宣揚しようとするのは、やはり彼らが編集に加わった書物に對する自負に基づくものと考えられるからである。

4. 『法言』序、『論衡』對作・自紀、『潛夫論』敍録、『風俗通義』序

第四類は漢代の諸子として、『法言』序、『論衡』對作・自紀、『潛夫論』敍録、『風俗通義』序である。まず『法言』序と『潛夫論』敍録は、どちらも各篇の目的や概説を行なう目錄がその中心にある。『法言』執筆の目的が「雄見るに諸子の各々其の知を以て舛馳し、大氏聖人を詆訾す。即ち怪迂を爲し、析辯詭辭し、以て世事を撓め、小辯なりとは雖も、終には大道を破りて衆を或はし、聞く所に溺れて自ら其の非を知らざらしむ。……故に人の時に雄に問ふ者有れば、常に法を用て之に應じ、誤して以て十三卷と爲す」(『漢書』揚雄傳下)というものであり、『潛夫論』も「當時の失得を譏る」(『後漢書』王符傳)ものであるから、世を是正しようとする執筆の目的が共通している。そしてそうした目的がやはり雙方の序に表れている。例えば『法言』序が「天生民而降すに、倅侗顛蒙として、情性を恣にし、聰明開けず。諸れに理を訓ふ。學行第一を課す」と教育の重要性を言うのと、『潛夫論』敍録が「先聖の遺業、教訓より大なるは莫し。博學多識にして、疑はしきは則ち問はんことを思ふ。智明の成る所、徳義の建つる所なり。夫子學を好み、人に誨へて倦まず。故に讚學第一を敍す」と言うのは、ともに卷頭第一篇の序において教育を説いており、兩篇きわめて近い立場にあると言えよう。

また『論衡』も既に述べた通り「論衡の造らるるは、衆書の並びに實を失ひ、虚妄の言の眞美に勝るに起るなり」（對作）、「僞書俗文の多く實誠ならざるを傷み、故に論衡の書を爲る」（自紀）と世を是正しようという意圖がその序に記されている。『風俗通義』序にも「言 流俗の過謬に通じて、事 之を義理に該すなり。……政を爲すの要は、風を辯じ俗を正すが最も其の上なり」とやはり世の是正を主題としている。このように『法言』『論衡』『潛夫論』『風俗通義』の序に共通する主張として、世の誤りを是正し啓蒙しようとする執筆の目的が見出されるのである。

以上のようにこの四篇は、それぞれに執筆の経緯や目的を中心に記述している。特に他書・他者を誤つたものとし、それを是正するという目的や、序をもつ各書がそれぞれに正しさを備えているという意義を強調している。一方、同じ諸子に分類される『莊子』『荀子』も、讚辭として莊周や荀卿個人を讚え、同時に『莊子』『荀子』という書のもつ價値を誇つていた。しかし『莊子』『荀子』の讚辭は、他書・他者を指彈し、是正しようとしているというよりも、あくまで『莊子』『荀子』のもつ絶大な價値を誇る點が中心になつている。『莊子』には確かに先秦諸子を批判する文があるが、同時に諸子の評價すべき點も舉げており、先秦諸子には評價すべき點もあるが、足りないものがあるという立場なのである。そしてそれに對して過不足ないのが、關尹・老聃という「眞人」であり、莊周であると言うのである。『莊子』『荀子』の讚辭はこのように、他書・他者を完全には否定するものでない。ところが漢代諸子には執筆の契機として、他書・他者の否定、世の是正があるのである。

このような漢代諸子の主張は、明らかに作者の自負より生じたものである。なぜなら作者に自分が正しいという自負がなければ、世の是正は主張できないからである。いわば自己の責任において是正を主張しているのである。それに比べれば、『莊子』天下、『荀子』堯問で弟子たちが、莊周や荀卿を讚え、『莊子』『荀子』という書の價値を誇つていても、その自負はなお莊周・荀卿という存在に依存したものと見えよう。それはあくまで莊周・荀卿を繼ぐ弟子

としての自負なのである。このような讃辭は、莊周・荀卿がいなければ成立しえないことからしても明白であろう。

次に第二・三類に見られた全體の包括への志向について考えてみたいのだが、漢代諸子にはこの志向が全く見られない。全體の包括への志向は、世の是正という目的に取って代わられたように思われる。考えてみれば世の是正とは、世のなか全體における部分的訂正を言うのであるから、世のなか全體を包括する必要はない。また、全體の包括とは、材料や書物の量を問題にする立場であり、呂不韋・淮南王のような資産家や司馬遷・班固のような史家には可能であったろうが、漢代諸子という個人の力では及びがたい面もあつたのかもしれない。

5. 『説文解字』敍

以上の四類に分類できず、中間に位置するのが『説文解字』敍である。ここでは文字史が説かれ、文字全體の包括が行なわれ、字説の混亂を正すべしと漢代諸子のように是正が主張されるのみならず、漢朝への讃辭も記されている。つまり雑家の書などにみられた全體の包括、『漢書』敍傳の特徴であつた漢朝の讃美、漢代諸子に共通した他者の是正、これらがみな『説文解字』敍に含まれているのである。その結果、秦漢期の序としては多くの要素を兼ね備え、逆にこれまでの四類のうちには分類しがたい序であると考えられる。秦漢期の序としてこの序は一つの整つた様式を備えたものと評價することも可能であろう。

おわりに

最後に編集・執筆者の人数に注目して概観してみよう。まず『莊子』『荀子』は後學たちによる編纂であり、『呂

氏春秋』『淮南子』は經濟力の豊かな呂不韋・淮南王のもとに集まった食客たちによる執筆・編集である。次に『史記』『漢書』『漢紀』は、父子・家族などそして荀悦個人によるが、『法言』『論衡』『潛夫論』『風俗通義』になると、いずれも完全に個人の著作物である。つまり、集團の編集から個人による著作へと變化しているのである。この變化と全體の包括から世の是正へという流れ、また自負の性質の相違は無關係ではないように思う。

全體の包括への志向は『呂氏春秋』『淮南子』そして『史記』に強くみられたものである。『呂氏春秋』『淮南子』は食客たちの執筆であり、執筆者が複数存在したために雑多な編集物となり、いわゆる百科全書の形となつたのである。言わばこの百科全書について、全體を包括したものと換言しているに過ぎない。それに對し『史記』は、父子二代の時間と努力を費やし、太史公自序にみられる發憤著書の結果できあがつたものである。發憤と多大な時間・努力によつて、全體の包括が成し遂げられたのである。漢代諸子という個人の力では、このような大事業を成し難いことは理解できよう。

自負の性質は、『莊子』『荀子』では莊周・荀卿に依存した、特に『莊子』『荀子』という書物に對する自負であつた。それが『呂氏春秋』『淮南子』では、書物の内容のみに向かうようになる。このように自負が書物に向かうのは、『莊子』『荀子』『呂氏春秋』『淮南子』の實際の執筆・編集者が複数の無名氏であるためであろう。書物の執筆・編集を行なつても名前は遺らず、その書物のみが彼らの存在を證明するのである。そのため書物の存在こそが、彼らにとつて最も重要だつたのである。各書物を優れたものと自負せずにはおられまい。

『史記』の自負は、後世への期待という形で表れ、『漢書』『漢紀』では書物に向かつていた。『史記』は既述の通り發憤と多大な時間・努力によつて完成されたものであり、その書に對する自負は大きなものであつたと想像されるが、完成時において廣く讀まれたものではなかつた。²³そのため司馬遷は當世ではなく、後世に期待したのである。

それに對して『漢書』『漢紀』はともに奉敕撰である。後世に期待する必要はなく、名の失われる可能性も低い。漢朝を稱讚し、書の價值が皇帝に認められればよいのである。自著への讚辭は、皇帝に價值を認めさせるためのものとさえ言うことができよう。

ところが漢代諸子の自負になると、自身が正しいという自負になる。自身が正しい結果、著わされた書物も正しいという自負を生む。更に進んで自身の正しさを世に廣めるといふことが、世の是正を意味することに通じる。自身の正しさに、世の人々を合わしめるのである。このような行爲はきわめて個人的なものと言へるのではないだろうか。そもそも世を自身の正しさに合わしめるために執筆を始め、完全に個人によつて執筆されたのであるから、書物の性質もより個人的になるのは當然である。世の是正を主張することによつて、全體の包括に比べ、主題としての規模を縮小させた原因がここにある。全體の包括とは、言うなれば世界觀を問うものであるが、世の是正とは、部分的な修正を説くものである。このように主題の縮小化は、集團の編集物から個人による著作物へという制作狀況の變化にまさしく對應しているのである。

『法言』『論衡』『潛夫論』『風俗通義』が漢代の諸子としばしば總稱されるのは、このように主題を全體の包括から、個人的な自己主張の世界へと回歸しているためであろう。兩漢諸子は『呂氏春秋』『淮南子』『史記』に見られた全體の包括を志向せず、先秦諸子のごとく個人に根ざした自己主張に終始したのである。ただし、先秦諸子は自身で著作を殆ど行なわなかつたが、自身の責任において自己主張をなし、弟子たちが書物に遺した。一方、兩漢諸子も自身の責任において自己主張をなしたが、それは主に書物の上でのことであつた。その結果、兩漢諸子には先秦諸子ほど多くの後學を魅了する力はなかつた。その原因には様々な理由を考へることができようが、逆に後學をもち得ない兩漢諸子であつたからこそ、書物を用いて自己表現を行なつたと理解することができる。そう考へるならば、

書物の傳播・流通に強く期待していたことすら豫想できよう。兩漢諸子の序には明確な表現がないが、『史記』に見られた「後世」への強い期待が、後漢の『風俗通義』序や『漢紀』序・『說文解字』叙にうかがえるのも、このような書物の傳播・流通を十分に想定させるものである。書物の編纂がより個人的なものとなるに従い、傳播・流通に期待せざるをえなくなつたのではないだろうか。

集團の編集物から個人による著作物へとという變化はまた、書籍の流通狀況や思想史・文學史と關連づけて検討される必要がある。變化の契機として前漢武帝の思想統制などは、大いに考えられるところではあるが、この問題に關しては機會を改めて考えることにしたい。

註

- ① 秦漢期と魏晉南北朝期の書物の制作狀況に大きな差があることは、『漢書』藝文志と『隋書』經籍志を比較すれば明瞭であろう。兩志に著録された總數にしても、漢志では「萬三千二百六十九卷」なのに對し、隋志では「五萬六千八百八十一卷」と四倍以上の差が現れている。
- ② なお、『爾雅』釋宮には「東西牆謂之序」という文もある。
- ③ 後に序を定義したものとしては、宋・王應麟『玉海』(卷二〇四、辭學指南)の「序者、序典籍之所以作也」や、明・吳納『文章辨體』の「其言次第有序、故謂之序」(序)、明・徐師曾『文體明辯』の「言其善敘事理次第有序若絲之緒也」(序)などがある。
- ④ なお、成立事情や執筆者の定かではない『急就篇』、『逸周書』、『中論』の序も除いておく。
- ⑤ 『法言』の序は、『法言』末尾に附されたもの他に、『漢書』揚雄傳(下)所收のものがある。小論では書物に附された序として、『法言』末尾のものを對象とするが、『漢書』所收のものについては既に拙論『漢書』揚雄傳所收「揚雄自序」をめぐって」(『學林』二八・二九合併號、中國藝文研究會)にて論じているので、参照されたい。

⑥ 『呂氏春秋』序意は現行本において十二紀の末にあるが、その後八覽・六論が続いている。つまり『呂氏春秋』の末尾にはないのだが、後述するように序意篇は十二紀に對する序となつていたので、十二紀の末尾にあるものと解しておく。また、それに關連して、『呂氏春秋』ははたして當初より十二紀・八覽・六論の形をとつていたのか、順次編纂されたものなのかが問題になつてくるが、その間の事情については齋木哲郎「『呂氏春秋』の成立狀況——（十二紀）序意篇の分析——」（『呂氏春秋研究』一、呂氏春秋研究會）に詳しい。

⑦ 序に見られる目録・目次に關しては、拙論「秦漢期の序と著作のあり方」（樟蔭女子短期大學紀要「文化研究」十三號、樟蔭女子短期大學學會）がある。

⑧ 『周易』の序卦が、現在の順序と異なるとはいへ、六十四卦の配列の意義を述べているのは、まさにこの次第を説くものであり、序と考えてよいようにも思われる。盧文弨『鍾山札記』卷四にも「吾以爲易之序卦傳、非即六十四卦之目錄歟」と言うが、小論では序という文體を考ふるために、条件の整つたものに限つて論じているので、ひとまず検討對象からは外しておく。

⑨ 『史記』には「凡百三十篇、五十二萬六千五百字」、『說文解字』には「九千三百五十三文、重一千二百六十三、解說凡十三萬三千四百四十一字」、『風俗通義』には「凡九千字」、『漢紀』には「凡爲三十卷、數十餘萬言」とある。因みに、『山海經』も、卷五・中山經の卷末に「右五臧山經五篇大凡一萬五千五百三字」と記している。そして卷頭に目録も備えているが、序を闕いている。これは序が成立する以前の様態を示すものかもしれない。

⑩ 他に『鹽鐵論』雜論も末尾におかれ、序に近い性質を備えているが、執筆者による序というよりも編集者による編集後記のようである。そこに記されているのは『鹽鐵論』という書物についてではなく、編者桓寬が記録した『鹽鐵論』の内容に對する評論である。つまり小論で取り上げている序とは性質を異にするので、對象から外しておく。

⑪ 顧實『莊子天下篇講疏』（一九八〇年、臺灣商務印書館）の自序に「莊子天下篇者、莊子書之絞篇、而周末人之學案也」と言われ、武内義雄『老子と莊子』第十章（『武内義雄全集 第六卷』二二二頁、一九七八年、角川書店）にも「天下篇は上下に區分せらるべきもので、その上半は周末諸子を論じて莊周のために氣を吐いて居て莊子全體の跋尾ともいうべきである」とある。

⑫ 『莊子』天下篇後半の「惠施多方」より以下は、惠施篇として別の篇と考ふるべきとの説が、武内義雄「讀莊私言」の末尾（全集第六卷）や王叔岷『莊子校釋』自序に見える。小論でもこの説に従い「惠施多方」より前を天下篇とし、序としての性質を備えた

部分と考えたい。

⑬ 金谷治『荀子』（岩波文庫）はこの章に小題を加えて「荀子は孔子に劣らず、時世の惡いたために輝かない——後序」とし、藤井專英『荀子』（明治書院、新釋漢文大系）は「餘説」で「本節は荀子全篇を總括する後序とも見るべきもので、荀子の弟子の手になるもの」と言っている。

⑭ 『莊子』天下篇の著者を後學とする考え方については、崔大華『莊學研究』（九七頁）「説劍」、《天下》的作者問題」、一九九二年、人民出版社）に詳しい。一方『荀子』堯問については、楊偉が「自爲說者已下、荀卿弟子之辭」と注している。また、『莊子』荀子の成立時期には多くの問題があり、定本編集の最終段階の時期も容易には決定できないと考えている。小論では検討の対象を「秦漢期」に限っているが、必ずしも『莊子』の定本編集の最終段階の時期（つまり小論で取り上げた序の部分の成立時期）を秦漢期に限定するものではない。あくまで秦漢もしくは秦漢に近接する時期と想定し、『莊子』荀子』を検討対象に選んだに過ぎない。

⑮ 要略にみられる稱讚の辭として、參考までに末尾の文を擧げておく。「若劉氏之書、觀天地之象、通古今之事、權事而立制、度形而施宜、原道之心、合三王之風、以儲與扈到治玄妙之中。精搖靡覽、棄其眇擊、斟其淑靜、以統天下、理萬物、應變化、通殊類、非循一迹之路、守一隅之指、拘繫牽連於物、而不與世推移也。故置之尋常而不塞、布之天下而不究。」

⑯ 『淮南子』許慎注にも「凡鴻烈之書二十篇。略數其要、明其所指、序其微妙、論其大體。故曰要略」と言う。

⑰ 黃暉『論衡校釋』對作の注に「翟灝曰、論衡以對作篇爲序、其後更有自紀一篇、則附傳也」と言う。

⑱ 『論衡』は、自紀篇に「吾有百篇。……按古太公望、近董仲舒、傳作書篇百有餘、吾書亦纔出百」とあることから、もと百篇以上あつたことが考えられるが、現存するのは八十五篇であり、そのうち招致篇は篇名のみ傳わる。『論衡』に篇名目録が備わつていれば、あるいは闕佚を生じなかつたかもしれない。

⑲ 余嘉錫『古書通例』（一九八五年、上海古籍出版社）の卷二「秦漢諸子即後世之文集」に次のようにある。「秦・西漢之人、學問既由專門傳受、故其生平各有主張、其發於言而見於文者、皆其道術之所寄……則雖其平日因人事之肆應、作爲書疏論說、亦所以發明其學理、語百變而不離其宗、承其學者、聚而編之、又以其所見聞、及後師之所講習、相與發明其義者、附入其中、以成一家之學。故西漢以前無文集、而諸子即其文集」

⑳ 王范之『呂氏春秋研究』（一九九三年、内蒙古大學出版社）は緒論で「（序意）篇是殘文、八覽六論都沒提說、想來是殘脫了」（四頁）と述べている。

㉑ この「俟後世聖人君子」という語は、『史記索隱』が言うように、『春秋公羊傳』哀公十四年の「制春秋之義、以俟後聖、以君子之爲、亦有樂乎此也」に基づくものであり、また王念孫『讀書雜誌』卷三之六の説の通り、『漢書』司馬遷傳に引かれる「以俟（師古曰、俟、古俟字）後聖君子」というのが本来の表現であつたらう。本来の表現が『漢書』の通りであつたとしても、司馬遷の語にはやはり後世への期待が込められているように思われる。

㉒ 例えば『文心雕龍』史傳には「子長繼志、秩序帝勳。比堯稱典、則位雜中賢、法孔題經、則文非元聖。故取式呂覽、通號曰紀」と言う。

㉓ 『漢書』司馬遷傳に「遷既死後、其書稍出。宣帝時、遷外孫平通公楊惲祖述其書、遂宣布焉」とあることから、『史記』は司馬遷の死後に讀まれるようになったらしい。

㉔ 『風俗通義』には「俾諸明哲幸詳覽焉」とあり、『漢紀』には「故君子可觀之矣」、『說文解字』には「庶有達者、理而董之」とある。